2019年1月20日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　　　**「エレミヤの生涯」**

聖書箇所：エレミヤ書43:1-7

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　昨年末にエレミヤ書から「新しい契約」というタイトルでお話しさせていただきました。今月は、次の文書「哀歌」に行こうかとも思いましたが、やはり、あの壮絶なエレミヤの生涯を語らずにはいられない、ということで、もう一回エレミヤ書からのお話とさせていただきました。

まず、エレミヤの出自です。エレミヤ書1:1に「ベニヤミンの地アナトテにいた祭司のひとり、ヒルキヤの子エレミヤのことば。」とあります。アナトテというのはエルサレムの北東4キロの古い村です。ヨシュアがカナンの地に入る時、神様はカナンの土地をイスラエルの十二部族に与えますが、レビ族だけは土地が与えられず、祭司の民として、各部族の地に「レビ人の町」という町を設け、レビ族はそこに住むことにされました。48の町があります。その一つがこのアナトテです。また、エリ系の祭司アビヤタルがダビデの子アドニヤに味方したため、ソロモンに追放されましたが、その町がこのアナトテでもありました。従って、エレミヤの家系は、このアビヤタルの系列と想像されます。父親のヒルキヤという名は「ヤハウェは私の受ける分」という意味です。同名の人物が何人かいますが、ヨシヤ王の時代に「律法の書」が埋もれているのを見つけた祭司ヒルキヤが有名です。エレミヤは、正統的なイスラエルの祭司の血筋であったと言えます。彼が生まれたのはBC647年頃で、当時のユダヤの王はマナセです。政治的にはアッシリヤに従属し、経済的には繁栄の時代で、宗教的には地場信仰、異教崇拝大流行で、列王記記者からはくそみそ、に言われています。そのマナセの45年の治世の末期です。

BC642年マナセが死に、その子アモンが王となりますが、家来に暗殺され、その子のヨシヤが8歳で王となります。エレミヤはまだ7歳くらいの時です。この頃からアッシリヤは内乱に悩まされ、カナンの地は、放置されるような状態になっていました。時のアッシリヤの王は大図書館を作ったことで有名なアッシュルバニパルで、彼がアッシリヤ最後の王となりました。東部イランのメディアとバビロンの地域に勢力を拡大した新バビロニアが強力になってきました。また小アジア東部のウラルトウが南下をねらっていました。BC627年アッシュルバニパルが死んだ年にエレミヤは神より、預言者の召命を受け、預言を開始しました。1:10-12に「見よ。わたしは、きょう、 あなたを諸国の民と王国の上に任命し、 あるいは引き抜き、あるいは引き倒し、 あるいは滅ぼし、あるいはこわし、 あるいは建て、また植えさせる。」/次のような主のことばが私にあった。「エレミヤ。あなたは何を見ているのか。」そこで私は言った。「アーモンドの枝を見ています。」/すると主は私に仰せられた。「よく見たものだ。わたしのことばを実現しようと、わたしは見張っているからだ。」と言われています。エレミヤは「諸国民の預言者」に任命されました。ここに出てくる「アーモンド」はヘブル語で「sha:ke:d」であり、「見張る」というのは「sha:kad」で、ごろ合わせの表現として有名です。すでに、エレミヤは「わざわいが北から来る」と預言していました。そしてエレミヤに「裁きが避けられない、と預言せよ」と神は言われました。エレミヤが20歳くらいの頃です。

BC626年にはバビロニヤでナボポラッサルが即位し、力を誇示していきました。北ではバビロニヤが強大になりつつあった時、ユダの国では、「律法の書」が発見され、ヨシヤ王は「申命記改革」と称せられる、宗教・政治改革を開始します。しかし、当時、ホルダという著名な女預言者は、改革をやっても無駄で「神はまちがいなくあなた方を罰します」と預言します。エレミヤも神の裁きが近いことを預言しますが彼はまだイスラエルに望みを持っていたようです。3:12では「行って、次のことばを北のほうに呼ばわって言え。 背信の女イスラエル。帰れ。 －－主の御告げ－－ わたしはあなたがたをしからない。 わたしは恵み深いから。 －－主の御告げ－－ わたしは、いつまでも怒ってはいない。」と言われています。「帰れ」は悔い改めの勧めです。4:2では悔い改めて「あなたが真実と公義と正義とによって 『主は生きておられる』と誓うなら、 国々は主によって互いに祝福し合い、 主によって誇り合う。」ことになる、と言っています。ここで言う「真実と公義と正義」のなされる社会が神の望まれる社会だ、と言っています。しかし、5:12では「（ユダの民は）主を否んでこう言った。 「主が何だ。 わざわいは私たちを襲わない。 剣もききんも、私たちは、見はしない。」と言われています。民は、“自分たちは神に選ばれた民なので、そんなひどいことになるはずはない”とうそぶく態度を採り続けているのでした。

BC614年、メディアによってアッシュールが陥落。BC612年にはバビロニヤによって首都ニネヴェが滅亡します。時の王はアッシュール・ウバリットII世。かの勢力を誇っていたアッシリヤ帝国の滅亡です。しかし、BC610年にエジプトで即位したネコII世はバビロニアの勢力拡大を阻止するためにBC609年に出兵し、ユダ王国はバビロニアの報復を恐れていましたので、エジプト軍の北上を阻止するため、カルメル山のふもとのメギドで、エジプト軍に対します。ここで、ヨシヤ王は戦死します。政治・宗教改革を推し進めたヨシヤ王も政治判断の間違いから、戦死するという事態となりました。この時、エレミヤがユダ王国の現状を嘆いたのがエレミヤ書のあとの「エレミヤ哀歌」と言われています。エゼキエル書にもこの時の嘆きの詩と推測される箇所もあります。代わりに王となったのはヨシヤの子エホアハズでした。しかし、エジプトはこのエホアハズを認めず、エジプト王の居るリブラに呼び出し、廃位し、エジプトに捕虜として連れていきました。そして、エジプトはエホアハズの兄のエホヤキムを王位につけました。エホヤキムはエジプトの属国として、政治を行いました。しかし、彼は、エジプトからの巨額な罰金に苦しめられているにも関わらず、宮殿建設などを行い、ユダの民に強制労働をさせた、と言われています。エレミヤは当然、エホヤキムを批判します。7:4-7でエレミヤは「あなたがたは、『これは主の宮、主の宮、主の宮だ』と言っている偽りのことばを信頼してはならない。/もし、ほんとうに、あなたがたが行いとわざとを改め、あなたがたの間で公義を行い、在留異国人、みなしご、やもめをしいたげず、罪のない者の血をこの所で流さず、ほかの神々に従って自分の身にわざわいを招くようなことをしなければ、わたしはこの所、わたしがあなたがたの先祖に与えたこの地に、とこしえからとこしえまで、あなたがたを住ませよう。」と言っています。エレミヤは裁きの預言をするけれども、多くの場合、希望の道も示します。しかし、エジプト、バビロニアの力におびえているユダの指導者にはその希望の道を信ずる信仰はありませんでした。7:11では「わたしの名がつけられているこの家は、あなたがたの目には強盗の巣と見えたのか。そうだ。わたしにも、そう見えていた。－－主の御告げ－－」という言葉があります。この表現はイエス様の宮清めで語られたことばです。

しかし、バビロニアはBC608年にはウラルトウを占領し、BC607年には王子ネブカドネザルが大軍を指揮し、エジプト軍が駐留していたユーフラテス川上流のカルケミシュの南のキエフを奪還、クラマティに基地をつくり、カルケミシュを伺う体制をとりました。その2年後BC605年、カルケミシュの戦いが始まり、ネコII世のエジプト軍が大敗しました。エジプト軍で「国に逃げ帰ったものは一人もいなかった」とさえ言われています。ネブカドネザルは余勢をかってエジプトに侵入します。エホヤキムは当初、バビロンへの貢献を停止し、エジプトを頼りとしたため、帰国途中のネブカドネザルにエルサレムを包囲されることになります。エホヤキムはバビロニアへの服属を表明しますがネブカドネザルが許す気配はありませんでした。エレミヤは「エルサレムの陥落」預言をします。エルサレムの民はエレミヤの処罰を要求します。彼は投獄されますが賢明な一部の長老がエレミヤを助けます。この時、ネブカドネザルの父ナボポナッサルが死んだため、ネブカドネザルは国に戻ります。ユダヤは辛うじて助かります。エレミヤの預言はここでは実現しなかったのです。

しかし、ネブカドネザルは、即位し、再びシリヤに戻り、戦闘指揮をします。この緊迫した状況の中でエレミヤは預言を文書にします。これを書いたのは弟子のバルクです。そして、BC603年にはエレミヤの預言を記した文書が焼き払われる、という事態になりました。ユダヤの一部の指導者はエレミヤ、バルクに逃亡を勧めます。どこかに隠れました。エレミヤの預言の言葉はユダの民にあまりに残酷と受け取られたのです。11:9-11には「ついで、主は私に仰せられた。「ユダの人、エルサレムの住民の間に、謀反がある。/彼らは、わたしのことばを聞こうとしなかった彼らの先祖たちの咎をくり返し、彼ら自身も、ほかの神々に従って、これに仕えた。イスラエルの家とユダの家は、わたしが彼らの先祖たちと結んだわたしの契約を破った。」 /それゆえ、主はこう仰せられる。「見よ。わたしは彼らにわざわいを下す。彼らはそれからのがれることはできない。彼らはわたしに叫ぶだろうが、わたしは彼らに聞かない。」と記されています。また主の言葉として15:1-3では「主は私に仰せられた。「たといモーセとサムエルがわたしの前に立っても、わたしはこの民を顧みない。彼らをわたしの前から追い出し、立ち去らせよ。/彼らがあなたに、『どこへ去ろうか』と言うなら、あなたは彼らに言え。『主はこう仰せられる。 死に定められた者は死に剣に定められた者は剣に、 ききんに定められた者はききんに、 とりこに定められた者はとりこに。』/わたしは四つの種類のもので彼らを罰する。－－主の御告げ－－すなわち、切り殺すために剣、引きずるために犬、食い尽くし、滅ぼすために空の鳥と地の獣である。」と言われており、神はいかなる執成しも受け入れる余地はない、と言われるに至ります。

BC601年にはエジプトが一時的に勝利することから、エホヤキムはこれに力づけられ、ネブカデネザルに再び反旗を翻します。このなかでもエレミヤはバビロニアがエルサレムを破滅させる、ということを繰り返し、繰り返し語ります。エレミヤは民衆から嘲りの声を浴びます。20:7-9には「主よ。あなたが私を惑わしたので、 私はあなたに惑わされました。 あなたは私をつかみ、私を思いのままにしました。/私は一日中、物笑いとなり、 みなが私をあざけります。/私は、語るごとに、わめき、 「暴虐だ。暴行だ」と叫ばなければなりません。 私への主のみことばが、一日中、 そしりとなり、笑いぐさとなるのです。/私は、「主のことばを宣べ伝えまい。 もう主の名で語るまい」と思いましたが、 主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて 燃えさかる火のようになり、 私はうちにしまっておくのに 疲れて耐えられません。」とあります。遂に、エレミヤは自分の生まれた日をのろうに至ります。

しかし、BC599年、ネブカデレザルは体制を整え、エホヤキムを叩くため、軍を動かします。ユダヤの指導者たちはバビロニアを恐れ、王を暗殺し、バビロニアへの従順を示そうとします。歴史家ヨセフスは、エホヤキムについては、自発的にエルサレム開城したが、ネブカデレザルは許さず、彼を殺し、城壁の外に投げ捨てた、といっています。このあとはエホヤキムの子エホヤキンが王となりますが、エルサレムを占領したネブカデレザルはエホヤキンを捕虜としてバビロニアに連れて行きます。第一次捕囚です。エゼキエルもこの時連れて行かれます。「貧しい民衆の一部」のみエルサレムに残された、と言われています。ヨセフスはこのエホヤキンについては悪く言っておらず「神の前に正しい人」とまで言っています。この王はバビロニアで後に厚遇され、王と食事を共にするところまで許されます。バビロニアのユダヤ人からの評判もよかったようです。ネブカデレザルはこのあとヨシヤ王の子マタヌヤをゼデキヤと名前を変えさせ王にしました。エホヤキン王は王座にあったのは三か月に過ぎませんでした。この間のエレミヤの預言と特定できる箇所はありませんが、恐らく、ユダヤの民の忌み嫌う、エルサレム滅亡の預言であったにちがいありません。また、バビロニア国内で内乱が多発したため、ネブカデレザルはユダへの支配の綱を緩めざるを得ず、表面は、エレミヤの預言は実現していない、ように見えました。BC594年にはエジプトでプサンメティコスII世が即位し、大国エジプトの復活が期待されていました。未遂に終わったとはいえ、BC593年にはエドム、モアブ、アモン、ツロ、シドンの反バビロニア同盟が結成されるかもしれない、というような事態も起きています。また偽預言者が多数出てきます。一寸明るい兆しがあると、民衆の受けが良い事を言う人間がでてくるのは世の常です。29:21-23には「イスラエルの神、万軍の主は、わたしの名によってあなたがたに偽りを預言している者であるコラヤの子アハブと、マアセヤの子ゼデキヤについて、こう仰せられる。「見よ。わたしは彼らを、バビロンの王ネブカデレザルの手に渡す。/彼はあなたがたの目の前で、彼らを打ち殺す。バビロンにいるユダの捕囚の民はみな、のろうときに彼らの名を使い、『主がおまえをバビロンの王が火で焼いたゼデキヤやアハブのようにされるように』と言うようになる。/それは、彼らがイスラエルのうちで、恥ずべきことを行い、隣人の妻たちと姦通し、わたしの命じもしなかった偽りのことばをわたしの名によって語ったからである。わたしはそれを知っており、その証人である。－－主の御告げ－－」」とあります。また29:30-32には別の偽預言者のことが言われています。「エレミヤに次のような主のことばがあった。－－「すべての捕囚の民に言い送れ。主はネヘラム人シェマヤにこう仰せられる。わたしはシェマヤを遣わさなかったのに、シェマヤがあなたがたに預言し、あなたがたを偽りに拠り頼ませた。/それゆえ、主はこう仰せられる。『見よ。わたしはネヘラム人シェマヤと、その子孫とを罰する。彼に属する者で、だれもこの民の中に住んで、わたしがわたしの民に行おうとしている良いことを見る者はいない。－－主の御告げ－－彼が主に対する反逆をそそのかしたからである。』」とも言われています。

ゼデキヤはエレミヤが言うようにバビロニアに従順な態度を採っていましたが、BC592年ついにエジプトと同盟し、アンモン人と組んでバビロニアに対抗しようとしました。彼はエレミヤの意見は時々聴取するのですが、結局は民の声に流されエレミヤの言うことは聞きませんでした。エジプトはユダに援軍を送りました。シリヤ軍は一時的にエルサレムの包囲を解きます。そして、エレミヤは再度、獄に入れられます。「脱走の罪」となっていますが、バビロニア軍への脱走を試みた、とされたのでしょう。エルサレムは再包囲されます。ヨセフスによれば18か月の包囲で城内は残虐劇が展開されることとなりました。エレミヤはここでも一貫してバビロニアへの降伏を呼びかけています。「敵の手に逃れる者は救われる」とまで言っています。逃亡すれば、助かる、と言っているのです。ユダヤ人の指導者はエレミヤを告発し「奴はきちがいです」とまで言っています。ゼデキヤ王は彼らにエレミヤの処分を委ねます。しかし、王の家僕のエチオピア人の嘆願により、エレミヤは解放されます。このように、エレミヤは最後のところで「逃れの道」が用意されます。エルサレムの民はバビロニア軍と対決し健闘しますが、「飢饉と飛び道具類」にやられた、と言われています。遂に、最後の時がきました。ゼデキヤ王はアンモンの方に逃げようとしましたが、エリコの近くで捕まり、王子たちの処刑を見せられ、目をくりぬき、鎖に繋がれバビロンに連れていかれました。第二次捕囚です。ネブカデレザルの親衛隊長ネブザルアダンがエルサレムに到着し、神殿を略奪し、町と神殿を焼きつくしました。エルサレムは廃虚と化します。残ったのは「貧民の一部」です。大祭司セラヤとその子ヨザダクもバビロンに連れていかれました。このヨザダクがモーセの兄アロン以降の大祭司の最後です。ゼデキヤはバビロニアで手厚く葬られました。大祭司ヨザダクも鎖を解かれた、と伝えられています。バビロニアは従順な者には寛容さを示しますが、反抗者には容赦しない、という態度でした。エレミヤはバビロン行きを勧められるがこれを拒否。「生まれ故郷の荒れ果てたみじめな残骸物の中に住むこととした。」と言われています。イスラエルの民と共にあることを望んだのでした。

ゼデキヤはユダ王国の最後の王となりましたが。BC586年のことです。この年がユダ王国滅亡の年になります。このあとユダヤはシリアの一州となり、ゼデキヤの高官であったゲダルヤが総督になります。総督はミズパに滞在しました。エレミヤの居た町です。ゲダリヤは人柄が「親切で寛大」といわれ、彼を慕う人間たちが彼の下に集まってきました。彼は、エレミヤの忠告を入れ、バビロニアへの従順を説き、土を耕す平和な生活を説きます。しかし、そう単純にはいきません。イシュマエルという人物がアモン人と手を結んでバビロニアへの反抗を勧めます。ゼデキヤは忠告があったにもかかわらず「同胞を疑うくらいなら、殺される方がまし」とまで言って、無防備でした。そして宴会で酔った時、裏切り者イシュマエル達に暗殺されてしまいます。ヨハナンなどのユダヤ人の指導者たちは激怒し、イシュマエルにギベオンで追いつきましたが、アンモンに逃げてしまいます。ヨハナンはエレミヤに、どうすべきか聞きます。エレミヤは、「この地に留まれ」と言います。ヨハナン達はバビロニアが軍を送り、滅ぼしにくることを恐れ、エジプトに逃れようとしたのです。エレミヤはゲダルヤが彼を自由にさせたのでミツパに住みましたが、結局、イスラエルの指導者たちとともにエジプトに下らざるを得ないことになります。しかし、エレミヤは42:15-16で「今、ユダの残りの者よ、主のことばを聞け。イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『もし、あなたがたがエジプトに行こうと堅く決心し、そこに行って寄留するなら、/あなたがたの恐れている剣が、あのエジプトの国であなたがたに追いつき、あなたがたの心配しているききんが、あのエジプトであなたがたに追いすがり、あなたがたはあそこで死のう。』と預言します。エレミヤは最後まで一貫して「いまは神がバビロニアを裁きの手段として用いられているのだから、これに従うのが主の民のあるべき姿である」と言っているのです。この時、第三次バビロン捕囚がありユダヤ人が更にバビロンに連れて行かれます。またエジプトのタフパヌヘスでエレミヤは預言して「エジプトのユダヤ人は滅ぶ。エジプト王パロ・ホフラが殺される」と言います。エレミヤの死後BC570年にバビロニアがエジプトに攻め入り、預言が現実となります。エレミヤ書の最後には、BC562年ネブカデレザルが死に、エビル・メロダクが王となったこと、そして、あのエホヤキンが釈放され、丁重な待遇を受けた、と記されています。エレミヤの最後についてエレミヤ書は語っていませんが、エレミヤはこのエジプトでユダヤ人民衆に石打の刑で殺された、と伝承されています。偽典、即ち聖書外の文書「預言者の生涯」の「エレミヤ」の箇所に書かれています。石打の刑は民衆による死刑の執行です。神の御加護を熱心に祈っているエジプトのユダヤ人達に「あなた達はバビロニアに殺される宿命にある」と預言するのですから、民衆の恨みを買うのは当然と言えば当然です。エレミヤは最後の最後まで悲劇的人生を送りました。

これでおわり、ということであればあの悲劇的預言を忠実に述べ伝えたエレミヤはどうなるのだ、という疑問が残るのは当然です。BC2c後半からAD1c半ばころの文書と言われている外典「バルク書」はイスラエルによる罪の告白と神のイスラエルとの新たな契約について語られます。バルク書2:35は「わたしはお前たちと永遠の契約を結び、わたしはお前たちの神となり、お前たちはわたしの民となる。わたしはもはやわたしの民イスラエルを、その与えた地から去らせることはない。」と言われています。これはエレミヤ書の「新しい契約」が念頭にあるのです。また偽典で第二バルク書と言われる「シリア語バルク黙示録」70:9では「災難を逃れ助かった者は、勝者も敗者も、わがしもべメシアの手に渡されることになろう」 と言われ、苦難の民の忍耐がメシア思想に繋がって行くことが暗示されています。更にのちに、第三バルク書「ギリシャ語バルク黙示録」も書かれます。BC2cには「エレミヤの手紙」と称せられる文書も書かれます。「偶像礼拝」を禁止する主張を、エレミヤの名の下に述べています。堅い信仰の代表者としてのエレミヤが意識されている、と言えます。どうも、エレミヤの生涯をみると、使徒パウロを思い浮かべるのは私だけではないでしょう。この文書の写本の一部がクムラン教団にて発見されているところからしても、エレミヤに対する大いなる敬意がユダヤ人の中に浸透していたと考えられます。AD136年の著作と考えられている第四バルク「エレミヤ余禄」では創世記の幻の神の人アビメレクを登場させバルクと会うという舞台設定で黙示が述べられます。ここでは三日目にエレミヤが復活し、イエス・キリストを預言した、と言われています。エレミヤがキリストの道を整える、という役割を与えられているように見えます。これらの文書はイエス様の十字架のあとに書かれた書物がほとんどですが、その中に示されているエレミヤを通して語られる思想は、旧約と新約の間の中間期と言われる時期に培われていった考え方と思います。もちろん、その源は旧約聖書にあります。エレミヤの悲劇は単なる悲劇ではなく、イスラエルの民に真の信仰の人として強く記憶に焼き付けられ、新約のメッセージを用意していると言えます。

最後にもう一点、申し上げておきたいことがあります。矢内原忠雄という無教会キリスト者の著作に『私の尊敬する人物』という本があります。その最初がエレミヤのことであり、そのあと、日蓮、リンカーン、新渡戸博士のことが書かれています。この書物が最初に出版されたのは昭和15年、1940年5月30日です。3月30日の序文があります。1937年7月の盧溝橋事件を契機に発生した日華事変以来日本は中国で泥沼の戦闘状態にあり、英米両国との関係も悪化の一途をたどっていました。矢内原忠雄氏は東大経済学部の教授で「植民地学」と当時で言えば「満州統治」が、講義の主たるテーマであったと思われます。日本の植民地政策を批判し、日華事変直後の1937年12月に東大を追放になっています。戦後、東大の総長を経験され時の政権に対して厳しい事を言いました。反骨の人です。この本を書き上げた1940年3月30日は1938年の「国家総動員法」、1940年初、齋藤隆夫の「反軍演説」と彼の議員除名、等あり、日本は破滅的戦争に向かっているのではないか、という予感が知識人層に広がっていた時です。そしてこの著作後、9月に日独伊三国軍事同盟、翌年、日米開戦へと繋がっていくのです。矢内原先生は、エレミヤが予言した「バビロニアに従え、これは神の与えた罪の罰だ」というメッセージを当時の日本にオーヴァーラップさせていたのに違いありません。「国際的な流れに従い、国際連盟の決議に従え」ということを言いたかったのでしょう。迫害を恐れず、神の言葉のみを宣べ伝えよ、というエレミヤへの神の言葉を、自らも得ていたのだと思います。当然、「迫害の時は長く続かない」という確信も持っていたでしょう。あの強靭なエレミヤの信仰に倣いたい、と考えていたものと思われます。エレミヤのあとに書かれている日蓮という人も迫害のなかにあって、日本の救いの道を声高に述べた人です。日蓮宗は、仏教の中でも最も戦闘的と言われている宗派です。エレミヤにしても日蓮にしても日本の国難に際し、武力に頼れとは全く言っておらず、神様乃至は天の力を頼りにしなさい、と言っています。どうでしょう、今の日本は多くは言いたくありませんが再びきな臭い世の中になりつつあります。平和主義国家がだんだん有名無実になり、国際的にも信用されなくなってきました。私たちキリスト者は皆から総スカン食らっても滅亡の預言をしなければならないのでしょうか。まだ、神の猶予はある、と思いたいのですが。エレミヤの時、日蓮の時、矢内原先生の時よりは「平和」をさけぶ民の声が大きくなっているとは思っているのですが。祈ります。

（ご在天の父なる神様、今日の礼拝と賛美の時を感謝いたします。今日はエレミヤの生涯を学びました。自分の国の民に対し、滅びの預言を繰り返す彼のすさまじさをみます。戦争の最中に自国敗北の預言を神の言葉として伝えるのですから周囲がどのような反応をするか想像に難くありません。私たちは、とても、彼に連なる者とはなりえない弱きものですが、戦争の匂いがし始める時に、せめて、「それはおかしい」と声をあげる勇気をお与えください。涙の預言者の言葉を私の中において下さい。そしてそれが主イエスの再臨を願う大いなる力となりますように。主のみ名により祈ります。アーメン）